

効率化や最適化、AI による最短ルートが重視される今、科学やビジネスにおける大きな飛躍は、むしろ「何の役に立つのか分からない」探究から生まれてきました。イグノーベル賞が象徴するように、一見無駄に見える研究や遊び心に満ちた好奇心は、思いがけない発見やイノベーションへとつながっています。イグノーベル心理学賞受賞者でもある渡邊茂氏の研究が示すように、日本がたびたび注目を集める背景には、結果を急がず問いそのものを楽しむ研究文化の存在がうかがえます。では、こうした探究はどのように価値へと結びつくのでしょうか。本対談では、探究を深めてきた渡邊氏と、「本屋大賞」立ち上げに参画し、アイデアを社会へ広げてきた嶋浩一郎氏が対話を重ね、発見が価値へとつながる道筋とそのヒントに迫ります。

【概要】

- 開催日：令和8年10月22日(木)
- 会場：千代田区立日比谷図書文化館 地下1階 日比谷コンベンションホール(大ホール)
- 時間：午後7時～午後8時30分(午後6時30分開場)
- 参加費：2,000円(学生1,000円) ※当日、学生の方は学生証をお持ちください。
- 主催：千代田区立日比谷図書文化館
- 協力：東京都立大学オープンユニバーシティ
- HP: <https://www.library.chiyoda.tokyo.jp/information/20261022-post 960/>



【講師プロフィール】

●渡邊 茂(わたなべ しげる)

慶應義塾大学名誉教授

慶應義塾大学大学院社会学研究科心理学専攻博士課程修了。文学博士(心理学)。

慶應義塾大学文学部人間関係学系教授を経て、現在は慶應義塾大学名誉教授。

1995年イグノーベル心理学賞受賞。2020年に第21回山階芳麿賞受賞。

専門は実験心理学、神経科学、動物行動学、行動薬理学。

主な著書として『鳥脳力』(化学同人社)、『ヒト型脳とハト型脳』(文芸春秋)、『美の起源—アートの行動生物学—』(共立出版)、『情動の進化』(中山書店)、『動物に「心」は必要か 擬人主義に立ち向かう』(東京大学出版)、『あなたの中の動物たち —ようこそ比較認知科学の世界へ』(教育評論社)、『なぜアートに魅了されるのか』(共著、共立出版、2025年)。



●嶋 浩一郎(しま こういちろう)

博報堂 執行役員 エグゼクティブクリエイティブディレクター

1993年博報堂入社。コーポレート・コミュニケーション局で企業のPR活動に携わる。

01年朝日新聞社に出向。スターバックスコーヒーなどで販売された若者向け新聞「SEVEN」編集ディレクター。02年から04年に博報堂刊『広告』編集長を務める。

2004年「本屋大賞」立ち上げに参画。

現在 NPO 本屋大賞実行委員会理事。06年既存の手法にとらわれないコミュニケーションを実施する「博報堂ケトル」を設立。カルチャー誌『ケトル』の編集長、エリアニュースサイト「赤坂経済新聞」編集長などメディアコンテンツ制作にも積極的に関わる。2012年東京下北沢に内沼晋太郎との共同事業として本屋B&Bを開業。

編著書に『CHILDLENS』(リトルモア)、『嶋浩一郎のアイデアのつくり方』(ディスカヴァー21)、『企画力』(翔泳社)、『このツイートは覚えておかなきゃ。』(講談社)、『ブランド「メディア」のつくり方 人が動く ものが売れる編集術』(誠文堂新光社)がある。

<本件に関するお問合せ>

千代田区立日比谷図書文化館 広報担当：南辻

電話：03-3502-3340 (代表)

※取材の申込については下記ページをご覧ください。

<https://www.library.chiyoda.tokyo.jp/journalists/>